

## 大学生のアフリカ諸国に対する意識調査 ——ICUにおける「発展途上国に おける教育」の授業実践より——

共同研究 千葉 泉弘、寺尾 明人、永田 佳之

### はじめに

1980年代は「失われた10年」と一般に言われている。途上国、特にアフリカ諸国の開発は各方面で挫折した。1950年代の後半の独立以来上昇してきた就学率についてもいろいろな国で、マイナス成長の現象が現れるようになった。こうした背景のもとで、世界銀行、UNDPなどの援助機関は、アフリカ援助を重視する政策をとっている。国際援助協力の分野でアフリカの占める地位は非常に大きい。しかし、このような世界の情勢に比べ、日本のアフリカに対する関心は政府、民間を問わず皆無ではないまでも低く、アフリカに関する知識・情報も限られている。

言うまでもなく、アフリカは一つの国ではなく、52の国々をかかえる大陸である。しかもそのうちの24カ国は日本の国土より広い国土を持つ。では、いったい何人の日本人が、それらの国々の名前を思い出し、そこに住む人々の姿を思い描くことができるだろうか。こう考えると、日本人の知識や意識の中で、アフリカやそこに住む人々に対する親近感は薄いと言わざるを得ない。

日本人のアフリカ諸国に対する知識および意識の低さは、大学生のそれにも反映している。大学入学試験によって、膨大な知識の体系の中を通過してきたにもかかわらず、彼らのほとんどはアフリカに対して全く無知であるかのようにすら見受けられる。

そして、アフリカ関連講座に対する大学側の態度もまた例外ではない。「ア

フリカについてもっと知りたい。もっと専門的に勉強してみたい。」そのような意欲を持った学生を、日本の大学はどれだけ育てようとしてきたのだろうか。

私たちはアフリカ諸国に対する日本人の知識および意識は低い、という認識に立つ。その上で、アフリカ諸国に対する大学生の意識化を大学の授業で図ることの可能性について実践的な試論を提出する。

本研究は、国際基督教大学（以下ICU）の教養学部教育学科の上級科目（EEd347J「発展途上国における教育」）を実践の場として、1992年度の秋学期（1992年9月17日～11月12日）に行われた。

ICUは「学問への使命」「キリスト教への使命」「国際性への使命」という三つの使命を建学の柱としている。特に、「国際性への使命」に関連して教養学部要覧には次のような理念が述べられている。

日本にあるICUは世界と日本を結ぶかけ橋である。この大学は、そのかけ橋としての使命を自覚し、国際社会に開かれた姿勢を堅持しつつ、とりわけ日本人に対して世界への窓をひらくとともに、海外の人々が日本文化に触れる道を用意することによって、国際理解と文化交流との進展に貢献し得るのである。

こうした国際理解の精神は各学科ならびに大学院の授業科目にいかされている。例えば教育学科の授業科目には、「教育の国際的展望」「比較教育と国際教育の基礎」「発展途上国における教育」などがある。

先に述べたように本研究はこのうちの「発展途上国における教育」を実践の場とした。この科目の目的は、「発展途上国の教育改革および教育の近代化に共通する問題を植民地政策の相違、言語の多様性に重点をおいて分析すること」である。これまでは主に東南アジア諸国、なかでもフィリピン、マレーシアの教育に焦点を当ててきたが、今回、授業実践者(千葉)は、この科目の講義内容をアジアの教育からアフリカの教育に変えた。したがって、アフリカの教育についての講義はICUの教育学科にとっても初めての試みであった。

実践者が1992年度「発展途上国における教育」の講義内容をアフリカの教育に変更した主な理由は次の3点である。

1. 発展途上国の教育問題はアジアよりもアフリカにおいて深刻である。アフリカの経済危機に伴う1980年代の構造調整プログラムによって、アフリカの教育は財政的に厳しい状況に置かれている。そのなかで教育は発展から後退へと逆戻りの兆候さえ示し始めている。それはアフリカの教育課題としてだけではなく、国際社会では世界の教育問題として認識されている。にもかかわらず、そのような重要な問題認識を学生に与える機会がない。
2. アフリカに興味・関心を持つ学生を育てるきっかけをつくる。「アジアは近く、アフリカは遠い」と言われるように、歴史的・文化的にアフリカは日本にとって遠い存在である。しかしながら、経済的にはアフリカと日本の関係は増大しつつあり、特に、多くのアフリカ諸国にとって日本の存在は大きい。そのような現実があるにもかかわらず、日本人の意識のなかではアフリカの存在は小さい。ここにアフリカと日本と相互国際理解の必要性が生まれる。大学での講義がそのような必要性に応えることは可能である。
3. 日本の大学において、アフリカに関する講義は少なく、しかもこれがアフリカの教育となると大学として組織的に取り上げているところは皆無ではないかと思われる。したがって日本の大学の中で、1カ所でもこうした講義が受講できる可能性を作り出すことは、日本の大学の将来にとっても有意義と思われる。

上記の理由により、実践者はアフリカの教育に関する講義を用意した。しかし、講義内容（授業シラバス）の作成はかなり困難であった。なぜならば、まず第一に、日本国内においてアフリカの教育に関する文献入手が困難であったからである。理由は日本語文献が少なく、外国語文献も入手が困難だからである。第二には、アフリカの教育について、定着した大学教育のシラバスというもの存在せず、すべて初めから講義内容を作らなければならな

ったことである。さらに、実践者は、ユネスコ在勤時代にいくつかのアフリカ諸国の教育計画や改革に参画してきたが、アフリカのすべての国を扱ってきたわけではない。したがって、短期間にアフリカ教育の研究を進めるにはある程度の限界があった。

しかしながら、このような困難は今回の実践者（千葉）に固有なものではなく、一般的に見出されよう。なぜならば、文献入手の難しさは誰にとっても同じ条件であり、アフリカ教育の専門家の不足は日本の教育界全体の問題だからである。ということは、これら二つの困難をどのように乗り越えて、アフリカ教育の授業シラバスを作成するか、ということは日本の大学教育にとっても意義ある試みでもあると言えよう。

## 研究の目的

まず最初に確認しておかなければならないことがある。それは、今回の授業実践は研究そのものではなく、よりよい授業実践を目的に行われたという点である。研究のための研究ではなく、授業のための研究である。

授業の主な目的は次の2点に要約できる。

1. 講義を通して受講学生にアフリカを意識化させ、アフリカに対する知識および意識を増進させる。
2. 教育という視点を通じて、アフリカ諸国の抱える問題を知り、アフリカの人々の現実を理解させる。同時に、日本との比較により視野を広げる。

授業の目的が達成されたかどうかの判断は難しい。しかし、授業の成果としては短期・中期・長期のそれぞれの段階で、次のような変化が現れることが期待される。短期的（講義修了後）には、学生のアフリカに対する知識が増大し、意識に変化がもたらされていること。中期的（数年以内）には、学生がアフリカに対して何らかの行動を起こすこと。（例えば、旅行に出かける、論文を書く、職業選択の基準を考える、など。）長期的（数年先以降）

には、アフリカと関わる人生を送ること。(様々な分野でのアフリカの専門家になる、日常的にアフリカに興味・関心を抱き続ける、など。)

現在は、「発展途上国における教育」の講義が終わった直後である。したがって授業の成果は短期的な視点からのみ考察される。

さて、以上のような授業目的の達成度を明示するのが本研究の目的である。いわば、本研究は、授業の自己モニタリングならびに短期的な自己評価であると位置づけられ、その意義は、大学における国際理解教育実践の自己評価としても位置づけられよう。

本研究は、「アフリカ諸国に対する大学生の知識および意識の低さは、アフリカの現実問題に関する講義を用意することによって改善される。それによってアフリカに対する知識の増加ならびに意識化が図られる」という仮説を提出する。よって、本研究は、その仮説を授業実践のなかで検証していくことである。

さらに、大学でアフリカの教育を講義するための授業シラバス試案を作成することである。前述したように、大学でアフリカの教育を講義するのは、文献的にも人材的にも困難である。端的に言ってしまえば、日本の教育界においてアフリカの教育研究は等閑に付されている。その結果の一つとして、アフリカの教育専門家がほとんどいないに等しい事態が生じている。一方で日本の国際貢献が叫ばれ、教育の分野でも国際的な教育援助・協力の施策の必要性が高まっているにもかかわらず、その施策を実施する人材が育成されていないのである。これは日本の大学教育のあり方にも一石が投げられるべき事態である。本研究の授業シラバス試案は、このような事態を改善の方向へと導くステップとなることを目指している。

## 研究の方法

本研究は、授業実践者の千葉と授業補助者の寺尾、永田の3人で行われた共同研究である。研究の分担は、千葉が授業を行い、寺尾、永田が授業なら

びにアンケート調査の作成、その集計と分析、講師の手配などを行った。

前述の仮説の検証のために今回私たちが用いたのは、アンケート調査と学生に課した2回のレポートである。また、私たちの研究とは別個に、ICUでは講義終了時に大学による学生の授業評価が行われる。その授業評価も今回の研究に利用した。

## 授業実践の記録

授業科目：「発展途上国における教育」

期間・時間：1992年度秋学期（9月17日～11月12日）

毎週火曜日・木曜日（全16回）

第4時限目（105分）

登録人数：60人（1年生1人、2年生15人、3年生28人、4年生10人、  
5年生3人、6年生2人、大学院生1人）

1. 9/17 講義 アフリカ近代史  
（植民地政策のひずみ  
独立国家への道—ナショナライゼーション）  
アンケート
2. 9/22 講義 アパルトヘイト1  
（白人・黒人分離政策  
南アフリカ史18c～19c）  
アンケート
3. 9/24 講義 アパルトヘイト2  
（南アフリカ史20c—国際的な孤立化  
南アフリカ教育政策史—差別のための教育法令）
4. 9/29 講義 アフリカの教育1  
（アジスアベバプラン—基礎教育普遍化への道のり）
5. 10/1 講義 アフリカの教育2  
（教育投資論—海外援助の必要生  
アジスアベバプランの欠陥—ケニアの事例）
6. 10/6 講義 アフリカの教育3

- (世銀による教育投資の分析  
教育における言語政策の問題－モザンビーク、タン  
ザニアの事例)
7. 10/ 8 講演 Pius Yasebas N'gwandu (タンザニア大使)  
「タンザニアの歴史とウジャマー教育」
  8. 10/13 講義 アフリカの教育 4  
(タンザニアの教育)
  9. 10/15 発表 学生による「ケニアの教育」スライド発表  
講演 伊勢崎賢二 (PLAN INTERNATIONAL)  
＝フォスター・プラン  
「海外ボランティア派遣の問題点」
  10. 10/20 講義 アフリカの教育 5  
(シエラレオネの教育  
ビデオ「シエラレオネの初等教育改革」)
  11. 10/22 レポート発表 ケニア
  12. 10/27 講義 アフリカの教育 6  
(情報と知識－発展途上国における難しさ)  
レポート発表 タンザニア・ガーナ
  13. 10/29 レポート発表 ナイジェリア・南アフリカ
  14. 11/5 講義 アフリカの教育 7  
(1970年代以降の教育改革－アフリカ人の理想像  
UNDP 人間開発指数)
  15. 11/10 講義 アフリカの教育 8  
(近年のアフリカの教育現状  
日本のODAについて)
  16. 11/12 期末レポート提出

## 調査のデータソース

今回、私たちは2種類の教室調査を行った。一つはアフリカに関するアンケートで、授業初日に行った。

もう一つは、アフリカの白地図に国名と首都名を書き込むもので、授業2

日目（2回目）に行った。いずれについても一部を変更したものを作成し、授業最終日（16回目）に行った。

私たちの調査とは別に、大学による「受講生による受講評価表」というアンケートが授業最終日（16回目）に行われた。この調査だけは無記名であるので、学生のより真意に近い思い、意見が述べられている可能性が高い。したがって、このアンケート結果も私たちの調査の参考にすることにした。（裏面の質問文に関しては本研究に合うように修正を加えた。）

また、実践者は学生の成績評価の手段として、学生に対して以下の課題で中間レポートと期末レポートの提出を求めた。

- ・ 中間レポート（10月20日提出）

アフリカの国々のなかから1カ国を選びなさい。そして、その国の政治・経済・宗教・社会・文化等のなかから興味のあるトピックを選び、それについて調査し、まとめなさい。

- ・ 期末レポート（11月12日提出）

中間レポートでとりあげた国の教育について調査し、教育の制度、歴史、現在直面している問題についてまとめなさい。

私たちは、学生の提出した2回のレポートの双方ともを調査対象とした。

以上、2種類4回の教室内調査、学生の授業評価、2種類のレポート、これらが今回の私たちの調査のデータソースである。

## データ分析

### 1. 教室内調査

2種類の教室内調査とも、授業の最初と最後の2回行われた。受講学生には同種の調査を最終日に再び行うということは伏せてあった。したがって、1回目と2回目との差異は、受講者が学習の過程で自発的にアフリカの知識を増やしアフリカを意識化していった結果ととらえることができよう。

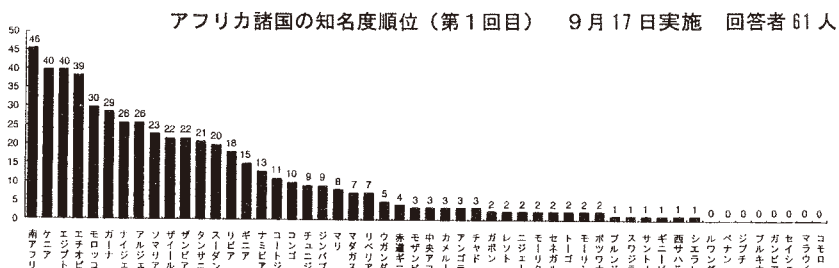


## 1-1. クラスアンケートその1 (資料1)

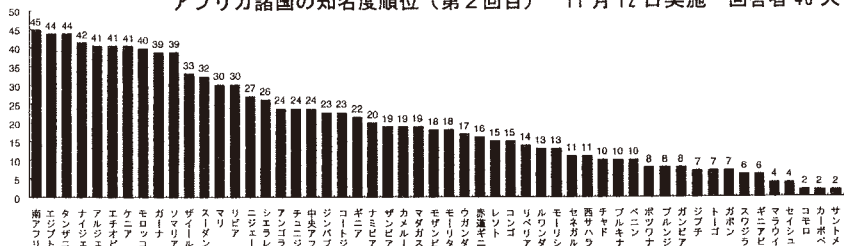
2回のクラスアンケートのうち、両者に共通するQ1～Q6までの結果を以下で分析する。

### Q1. アフリカの国々で知っている国の名前を記入してください。

この質問は、受講者の知識の増加を測るためのものである。国名だけではあるが、第1回目では52カ国中44カ国(84.6%)、第2回目では52カ国全部(100%)が言及された。記入された国名総数は、第1回目の537カ国から、第2回目では1074カ国へとちょうど倍増している。また、一人当たりの平均記入国数は、第1回目が8.8カ国、第2回目が22.4カ国で、2.5倍になっている。こうした増加率が高い方なのか、低い方なのかは他に同様のデータがないため速断できないが、国名を知っているという意味での知識が増加したのは明らかである。



アフリカ諸国の知名度順位（第2回目） 11月12日実施 回答者48人



注) 第1回目の回答者数、授業登録者数、第2回目回答者数の人数の違いは、第1回目が登録前であったこと、第2回目はレポートの仕上げに忙しく無回答の学生がいたことによる。

Q2. アフリカの国々であなたにとって一番興味・関心のある国はどこですか。

この質問は、受講学生のアフリカに対する意識の変化を知るためのものである。

第1回

- 1) 特にない。18人
- 2) ある。→国名 (人数) 理由

南アフリカ	(22)	アパルトヘイト、五輪参加、ラグビー
エジプト	(6)	歴史・観光
エチオピア	(3)	政情不安、歴史(シバの女王)、マラソン
ザイール	(2)	銅などの資源、音楽
ソマリア	(2)	内戦・ガリラ
タンザニア	(2)	留学生を知っている、マラソン
アルジェリア	(1)	カミユ
スーダン	(1)	政治
チュニジア	(1)	友人がいる
マダグレ諸国	(1)	移民文化
モロッコ	(1)	ロス五輪の裸足の少女
ガーナ	(1)	高校の数学の先生が協力隊員をしていた国

第2回

- 1) 特にない。0人
- 2) ある。→国名 (人数) 理由

ソマリア	(9)	自衛隊援助、内戦、早稲、飢饉
ケニア	(9)	知人、レポート、授業での紹介、行きたい
タンザニア	(7)	レポート、行きたい、大使、友人、ケニアと対照的
ナイジェリア	(6)	レポート、民政移管問題、部族の多さ、ピエラ戦争、経済状態の悪化
南アフリカ	(5)	アパルトヘイト、レポート
エチオピア	(2)	友人、女性の美しさ
ガーナ	(1)	無文字社会
ジンバブエ	(1)	レポート
スワジランド	(1)	南アの中の小国
チュニジア	(1)	友人
マダガスカル	(1)	島国としての人種・環境
マリ	(1)	知人が人類学調査に行っている
モロッコ	(1)	イスラム・キリスト教の接点、アフリカだがアフリカでない文化

第1回目と第2回目では、次のような変化がみられる。

- 1) 第1回目には南アフリカに対する興味・関心が圧倒的(22人、36%)であるのに対し、第2回目では分散している。
- 2) 特に興味・関心なしと答えた学生は、第1回目の18人(29.5%)が第2回目では2人(4.3%)へと激減している。
- 3) 第1回目にソマリアをあげたものは2人だったが、第2回目には9人に増えた。たまたま講義期間中に、ソマリアに対する国際的な救援活動が行われ、連日マスコミで報道されたため、同国への興味・関心が高まったと思われる。
- 4) 授業のなかでケニア(学生の発表と伊勢崎氏の講演)とタンザニア(N'gwanu 大使の講演)をとりあげたため、この2カ国への興味・関心が高まった。ケニアをあげたものは0人から9人へ、タンザニアは2人から7人へ増加した。
- 5) 興味・関心を持った理由として、タンザニア、ナイジェリア、南アフリカ、ジンバブエの各国について「レポートを書いたため」という学生がいた。
- 6) 興味・関心があるとしてあげられた国は第1回目が12カ国、第2回目が14カ国で数としてはさほど増えなかった。第1回目であげられながら第2回目であげられなかったのはザイール、アルジェリア、スーダン、マグレブ諸国。その逆は、ケニア、ナイジェリア、ジンバブエ、スワジランド、マリであった。
- 7) 興味・関心を持った理由を見ると、第1回目に比べて第2回目の方がより詳しくなっている傾向がある。また、ケニア、タンザニアは「行きたい」と思う学生が現れた。

以上の変化により、受講学生のアフリカに対する知識および意識は、講義を通して深まる傾向が生じたということができよう。

Q3. 最近、新聞やテレビで見たアフリカに関するニュースがあれば、その主なものをあげて下さい。

この質問は、受講学生のアフリカに対する日常的な意識が受講前と受講後  
でどう変化したかを知るためのものである。

第1回		第2回	
内容	人数	内容	人数
南アフリカに関するもの	(計 29)	なし(回答なしも含む)	18
アパルトヘイト	24	南アフリカに関するもの	(計 9)
黒人同士の内ゲバ	2	アパルトヘイト	4
ラグビー	2	マンデラの活躍	2
オリンピック参加	1	インカタ対ANC	1
		白人と黒人の結婚	1
		サラフィナ(ミュージカル)	1
その他	(計 27)	その他	(計 45)
ソマリアの内戦	9	ソマリアの内戦(自衛隊援助)	22
難民	5	リベリアの内戦(停戦)	3
かんぼつ・飢饉	5	アンゴラの内戦	3
ユニセフの黒柳徹子	2	モザンビークの内戦	2
エチオピアの内戦	2	エチオピアの飢饉	2
タンザニアの音楽家	1	ケニアの報道体制	2
アンゴラの民主化と選挙	1	ナイジェリアの民政移管	1
エジプトでの遺跡発見	1	エジプトの地震	1
タンジールのカパス(作家のW・パロウス)	1	エジプトでのピラミッド調査	1
		ニエレレのユネスコ賞授賞	1
		マリの砂漠化	1
		チャドの砂漠化	1
		自動車ラリーを阻む政情不安	1
		アフリカ諸国の独立	1
		カーター元大統領のアフリカ重視の発言	1
		ローリングス大統領当選	1

第1回目と第2回目では、次のような変化がみられる。

- 1) 第1回目では、南アフリカに関するものが全体の51.8%を占めているが、第2回目では、16.7%に減少している。逆に、ソマリアに関するものは16.1%から40.7%に上昇している。これはマスコミ報道の影響をそのまま反映したためと思われる。
- 2) 第1回目の内容より第2回目の内容の方が多様になっている。これは学生がアフリカに関する大きな報道だけでなく、小さな記事まで目を通していた可能性を示していると解釈できる。

以上、Q3でもQ2と同じように、アフリカに対する学生の知識および意識は深まる傾向が生じたといえよう。

Q 4. あなたにとってアフリカのイメージを下から一つ選んで○をつけて下さい。

- 1) きれいだ      2) きたない      3) ちかい      4) とおい  
 5) ゆたかだ      6) まずしい      7) あかるい      8) くらい  
 9) 広大だ      10) 辺境だ      11) すすんでいる  
 12) おくれている      13) その他

この質問は、受講学生のアフリカに対する受講前と受講後の感覚的なイメージ変化を調べるものである。用意したイメージは上記の 12 のイメージである。

第 1 回目	(人)	第 2 回目	(人)
9) 広大だ	39	9) 広大だ	22
4) とおい	13	4) とおい	10
6) まずしい	9	6) まずしい	9
12) おくれている	6	12) おくれている	7
13) その他	6	13) その他	6
7) あかるい	4	5) ゆたかだ	5
2) きたない	3	7) あかるい	3
10) 辺境だ	2	1) きれいだ	0
1) きれいだ	1	2) きたない	0
5) ゆたかだ	1	10) 辺境だ	0
3) ちかい	0	3) ちかい	0
8) くらい	0	8) くらい	0
11) すすんでいる	0	11) すすんでいる	0
	(84)		(64)

左記の 1 と 5 は、「自然が」という条件つきである。  
 また、13 の内容は以下の通り。  
 「強い」、「乾燥している」、「暑い」、「未知の土地」、「特になし」、「多様だ」

13 の内容は以下の通り  
 「発展途上」、「難しい」、「西・東洋と違う新しい価値観」、「混乱」、「リズムだ」、「複雑」

受講前と受講後の感覚的なイメージについては、次のような特徴を指摘できる。

1) アフリカのイメージ上位4つ(広大だ、とおい、まずしい、おくられている)は変化なかった。全体に占める割合も79.8%と75%でほとんど変化なかった。

2) 第2回目であがったアフリカに対するネガティブなイメージ(「きたくない」3人、「辺境だ」2人)は第2回目ではあがらなかった。

この結果からわかることは、アフリカに対する感覚的なイメージは講義から大きな影響は受けていないということである。

Q5. アフリカと言えば何を思い浮かべますか。下から一つ選んで○をつけて下さい。

- 1) 大自然      2) 野生の動物      3) 部族(民)      4) アパルトヘイト  
 5) 芸術      6) スラム      7) 奴隷      8) 難民  
 9) 政情不安      10) 経済破綻      11) 紛争      12) 植民地  
 13) その他

この質問では、日本でアフリカが報道される際のキーワードを思われる言葉を選んだ。そして受講前と受講後に変化があるかどうかを調べた。

第1回目	(人)	第2回目	(人)
1) 大自然	20	3) 部族(民)	19
2) 野生の動物	18	1) 大自然	12
3) 部族(民)	14	9) 政情不安	7
4) アパルトヘイト	9	4) アパルトヘイト	6
13) その他	9	12) 植民地	6
12) 植民地	7	2) 野生の動物	5
9) 政情不安	4	13) その他	4
7) 奴隷	4	10) 経済破綻	3
8) 難民	4	11) 紛争	3

10) 経済破綻	3	5) 芸術	2
5) 芸術	1	7) 奴隷	2
6) スラム	1	8) 難民	1
11) 紛争	0	6) スラム	0
	(94)		(70)

13の内容は以下の通り。(人数)

「飢餓」(3)  
「砂漠化」(2)  
「貧困」(1)  
「マラソンが強い」(1)  
「民族音楽」(1)  
「英語」(1)

13の内容は以下の通り。

「飢餓」  
「歴史」  
「人口」  
「女性」

この調査からは、次の特徴を読みとることができる。

- 1) 第1回目で、「大自然」「野生の動物」と回答した学生は38人(40.4%)いたが、第2回目では17人(24.3%)に減少した。
- 2) 「部族(民)」「政情不安」「紛争」といったイメージが上昇し、「野生の動物」「奴隷」「難民」といったイメージが下降した。

「大自然」「野生の動物」といった回答が減少し、「部族民」「政情不安」「紛争」といった回答が増加したのは、授業でアフリカの現実を講義した影響であろうと思われる。

Q 6. あなたのアフリカの子どものイメージを一つ選んで○をつけて下さい。

- |         |          |          |           |
|---------|----------|----------|-----------|
| 1) あかるい | 2) くらい   | 3) うえている | 4) ゆたかだ   |
| 5) 不幸だ  | 6) たくましい | 7) まずしい  | 8) かわいそうだ |
| 9) きれいだ | 10) きたない | 11) その他  |           |

この質問はアフリカの子どもに対するイメージの変化を調べるためのものである。

第1回目	(人)	第2回目	(人)
3) うえている	27	6) たくましい	14
6) たくましい	16	7) まずしい	14
7) まずしい	13	1) あかるい	13
1) あかるい	7	3) うえている	6
11) その他	5	11) その他	6
8) かわいそうだ	3	8) かわいそうだ	3
5) 不幸だ	2	5) 不幸だ	2
9) きれいだ	1	9) きれいだ	2
2) くらい	0	2) くらい	1
4) ゆたかだ	0	4) ゆたかだ	1
10) きたない	0	10) きたない	0
	(74)		(62)

11の内容は以下の通り。  
「子供の頃から働いている」(1)  
「恵まれていない」(1)  
「目がきれい」(2)  
「表情がいい」(1)  
「飢えているけど明るい」(1)

11の内容は以下の通り。  
「子供だ」、「よく働く」  
「栄養失調」、「純粹」、  
「人数の多さ」、「わからない」

この調査からは、次のような特徴を読みとることができる。

1) アフリカの子どもに対する「うえている」というイメージが、第1回目の27人(36.5%)から、第2回目では6人(9.7%)へと減少している。

2) 「あかるい」というイメージが7人から13人へとほぼ倍増している。

このイメージ変化はあらかじめ予想されたものであった。1980年代のユニセフキャンペーン等を通じて、日本人の目には飢えたアフリカの子どもの像が焼き付いている。受講生の多くがそのような子どもイメージを持っているだろうことは予想できた。それがアフリカの教育の講義を通して激減するだろうことも予測できた。この変化に関しては、学生によるケニアのスライド上演のなかにてきた子どもたちの明るい笑顔が大きな影響を与えたと思



われる。

## 1-2. クラスアンケートその2

ここでは、クラスアンケートのうち、授業最終日にのみ設けられた授業に関する質問を分析する。

Q1. このコースをとってからアフリカに関してどのような興味を持つようになりましたか。

この問いに対して、一人を除く全員がアフリカに興味を持つようになったと答えた。興味の対象としては、政治、経済、歴史、習慣、教育、飢餓、援助、人々の生活、都市生活と農村生活、民族問題、多様性、言語の複雑さ、植民地遺制の影響、混血人種などがあげられた。また、3人の学生がアフリカに行ってみたいと書いていた。

Q2. このコースをとってから新聞・テレビ等のアフリカのニュースに注意するようになりましたか。

はい	38人
いいえ	3人
無回答	3人

84.6%の受講生が「はい」と答えた。この数字は比較的に高い割合でアフリカに対する意識化が生じたことを示している。

Q 3. 現代のアフリカが抱えている一番重要な問題は何だと思いますか。一つだけ記して下さい。

1. 民族対立（内戦）	10人
2. 経済問題（危機）	7人
3. 教育	5人
4. 食料問題（飢餓）	4人
5. 近代化	4人
6. 人口爆発	3人
7. 人的資源の開発	2人
8. 国民意識の統一	2人
9. 国の安定	2人
10. 植民地遺制の影響	1人
11. 自然環境の破壊（砂漠化等）	1人
12. 黒人と白人の和解・融和	1人
13. 支配者層の汚職	1人
14. 民主化	1人
15. 援助	1人

ここでは多岐にわたる重要な問題が提出された。これは受講生の関心の広がりを見せているとみることができよう。

Q 4. 日本とアフリカ諸国が相互理解を深めるためには、何が一番大切だと思いますか。あなた自身の意見を書いて下さい。

意見は、人的交流の大切さについて書かれたもの、情報交流の大切さについて書かれたもの、その他に大別できる。それを要約すると以下のようになる。

人的交流について

- ・大学生、技術者の交換留学を促進する。
- ・資金援助だけでなく人的援助をする。特に技術の無償協力をしていく。
- ・アフリカ人の友だちをつくる。
- ・日本人がもっとアフリカに行く。

### 情報交流について

- ・お互いに関心を持つ。
- ・メディア（映画・テレビ・本・雑誌・映画など）を通じてアフリカの現実を伝える。
- ・アフリカの情報を多く入手する。
- ・一人一人がお互いの歴史・文化を知る努力をする。
- ・大学でアフリカに関する講座を増やす。
- ・小学校、中学校、高等学校の社会科の授業でアフリカを取り上げる。
- ・日本で開発教育を促進していく。
- ・アフリカの子どもたちに教育の機会を与える。

### その他

- ・アフリカ諸国が必要だと感じていることをおしきせではなく手伝う。
- ・共感を持つ。
- ・双方の接点を見つける努力をお互いがする。
- ・日本人の価値観を中心にして考えない。
- ・外交政策においてアフリカを今よりも重視する。

## 1-3. 白地図への国名・首都名記入

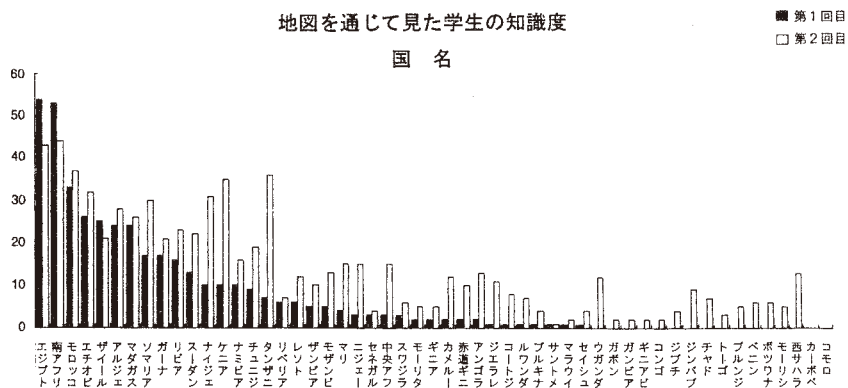
白地図への国名・首都名の記入は、アフリカ諸国に対する受講学生のより正確な知識を測るために行われた。前述のアンケートでは、知っている国の名前をあげるだけであったが、今度は白地図と対応させるため、正答率はかなり低くなることが予想された。

その結果、国名については、第1回目では52カ国中正答したのは37カ国（71.2%）であり、15カ国は一つも当たらなかった。しかし第2回目では52カ国一地域の全部（100%）が正答であった。正解総数は403から717へと1.8倍に増えた。一人当たりの正解数は平均7.5カ国から15.6カ国へとほぼ倍増した。また首都名では、第1回目に52カ国中10カ国（19.2%）しかあがらなかったものが、第2回目では、52カ国中19カ国（38%）があがった。総正解数は73から163へと2.2倍になった。一人当たりの正解数は平均1.4から平均3.5へと2.5倍に増えた。

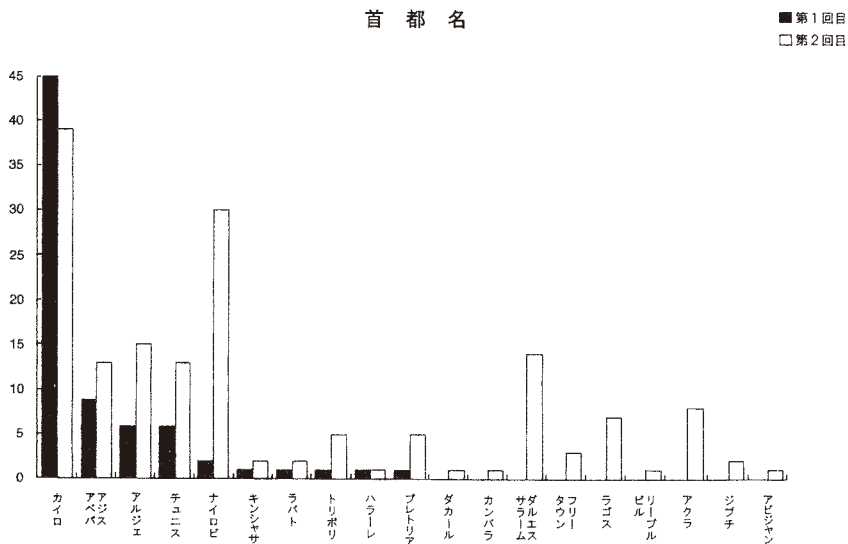
前述のとおり、実践者は授業の最初に行なったこの調査をもう一度行う予定

であるとは学生に告げなかった。したがって、この結果は授業期間の間に、学生が知らず知らずのうちに増やした知識量だと言ってよいだろう。

地図を通じて見た学生の知識度  
国名



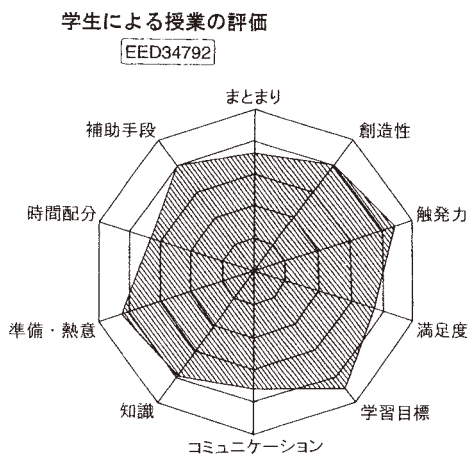
首都名



## 2. 「受講生による授業評価表」

ICUでは次のような受講生による授業評価を、授業最終日に行っている。  
次の結果は、今回の授業および授業実践者に対する評価である。

1. 講義は全体としてよく纏まっていた 3.60
2. 講義の内容は創造性に富むものであった 4.06
3. このコースから触発される機会が多かった 4.46
4. このコースによって自分の期待していたものが満足された 3.70
5. 教員は学習の目的をはっきりと示した 4.47
6. 教員と学生との間にコミュニケーションが十分成り立っていた 3.57
7. 教員はこのコースの内容について十分な知識を持っていた 3.94
8. 教員は周到な準備をし熱意をもって授業を行った 4.26
9. 授業の進め方の時間的配分は適切であった 3.30
10. 学生の理解を助けるために各種の補助手段を適切に用いた 4.02



また、4つのアンケートにはそれぞれ次のような回答（要約）が書かれていた。（回答者数 46人）

このコースのどの点が最も良かったと思われませんか。

- ・アフリカについて知り、考えるきっかけとなった 28人
- ・ゲストスピーカー（プランインターナショナル伊勢崎氏、N'gwandu タンザニア大使）の話が聞けたこと 22人
- ・千葉先生の熱意が伝わってきたこと 10人
- ・レポートを発表できたこと 6人

このコースのどの点が最も良くなかったと思われませんか。

- ・統計数字やグラフを使っでの説明が多すぎた 12人
- ・スーパー 4限 (12:55～14:40) という授業時間が悪い(眠くなる) 5人
- ・自分で探せる資料が少ない 4人
- ・授業回数が少なすぎる 1人

- ・出席点が見つからない 1人
- ・クラス人数が多すぎる 1人

このコースに参加することにより、あなたの進路（職業選択）、または人生観に何らかの変化がありましたか。もしあれば、その理由を具体的に述べて下さい。

- ・アフリカは1つの国だと思っていた。自分がアフリカについて何も知らないということに気づいた。
- ・教育協力、援助に対する興味が増し、将来を考える上で意識するようになった。アフリカについて興味がわいた。
- ・NGOかUNに就職したいと前から考えていたので、このコースをとって、第三世界にどのようなアプローチのしかたがあるか考えるきっかけとなった。
- ・卒論で開発の問題を扱うのですが、開発における教育の位置というのを改めて考えさせられました。
- ・外交とか国際関係の仕事にもともと興味があったのですが、このコースに参加してから、もっと発展途上国に目が向くようになりました。
- ・世界各国の現状に詳しくなって機会があればそれらの国々の様子を自らの目でもって確かめたいと思った。
- ・進路変更と言うほど大げさではないが、私は以前から援助などに関心があり、将来は環境問題などからんだ援助をするようなNGOに入るのが夢です。そんな私に改めて教育の重要性をこのコースは教えてくれました。
- ・アフリカに対する悪い偏見が払拭されたように思う。
- ・そこまで大きくないけれど、でもちょっとアフリカで教師をやってみたくなくなった。
- ・アフリカという今まで知らなかった国々について学ぶことができ、もっと世界において自分の視野を広げなければいけないと思いました。
- ・西洋的、あるいは先進国よりの視点ではアフリカを正確にとらえることができないのではないかと思った。国際化を唱える大学にいる自分にとって途上国も決して軽視してよい存在ではなく、知るべきことがたくさんあることを認識した。
- ・外国の教育にはまるで興味がなかったのだが、アフリカの場合、これからの発展に注目するのは非常に面白いと思うようになった。
- ・もとより青年協力隊には興味はあったが、実際また少し近づいた気がする。
- ・アフリカで仕事をしてみたいと思う。未知の世界のことを知ることによって新鮮な感動があるような気がするから。
- ・大学生であるのに、これ程までにアフリカについて知らないと恥ずかし

いという気になった。世界の中の話題になりにくい国々についても目を向けていく必要性を感じた。

- ・ちょうど今の時期は就職セミナーが学校で始まっており、今までに何度も大学院へいくべきか就職するかで迷っていたが、私なりの道で発展途上国へ関わりたいと思っていた気持ちが強く固まり、就職するにしろその道を歩んでみたい。

その他、感ずる点があればなんでも自由に書いて下さい。(意見・要望の要約)

- ・アフリカに行ってみたい 3人
- ・アジアについても知りたい 2人
- ・最終日に行った再テストのアイデアがいい 2人
- ・アフリカでも国をしばって、もっと詳しい話を聞きたい。 1人

### 3. 受講生のレポート

受講生の2回のレポートで選択された国およびその人数を以下に記す。

	中間レポート	期末レポート
ケニア	14人	14人
ガーナ	9人	7人
ナイジェリア	8人	9人
タンザニア	7人	8人
南アフリカ	5人	5人
エチオピア	4人	0人
モロッコ	3人	2人
エジプト	1人	2人
アンゴラ	1人	1人
ジンバブエ	1人	1人
	(53人)	(49人)

レポートを書くにあたって受講生の最大の悩みは資料入手の困難さであったようだ。実践者は、図書館での文献探しと同時に、積極的に当該国大使館を訪問し、直接資料請求をすることをすすめた。

結果的に、レポート対象国となったのは10カ国で全体の19.2%にすぎなかった。しかも、ケニア、ガーナ、ナイジェリア、タンザニア、南アフリカ

の5カ国に全体の87.8%が集中した(期末レポート)。これはアフリカ諸国のなかで相対的にみて、比較的資料入手可能性が高いのがこの5カ国であることを示している。

原則として、期末レポートと中間レポートの対象国は同じであるように指示した。しかし、ナイジェリア、タンザニア、エジプトについては期末レポートの数が1本ずつ増えている。これは中間レポートでエチオピアを対象とした受講生が、エチオピアの教育資料が入手困難であるとの理由で変更を申し出たため、実践者がそれを認めたことによる。

ガーナ、エチオピア、モロッコについて、期末レポートの本数が中間レポートのそれより少なくなったのは、該当する学生が授業から脱落したためである。

受講生のレポートの質はばらつきがあったが、総じて少ない資料の割にはうまくまとめられていた。2は受講生のレポートの題目リスト一覧である。これらのレポートはICU教育研究所の資料室で閲覧可能である。

レポートのなかに、資料を入手するために大使館に行ったことが印象深く述べられているものが複数あった。同様の印象は実践者にも直接受講生から伝えられた。受講生にとっては、大使館に行き、アフリカ人の担当者と直接話すことがアフリカに対する関心向上に結びついたようである。

## 分析によって得られた結論

私たちの研究は、「アフリカ諸国に対する日本人の知識および意識は低い。それは大学生においても同様である。」という認識のもとに始められた。そして、私たちは「アフリカ諸国に対する大学生の知識および意識の低さは、アフリカに関する講義を用意することによって改善され、アフリカに対する知識の増加ならびに意識化が図られる」という仮説のもとに授業実践を行った。具体的には、アフリカ諸国に対する大学生の意識化を『発展途上国における教育』という授業科目のなかで図ることの可能性について試論を提出す



ることであった。

私たちの仮説の検証は2種類4回の教室内調査、学生の授業評価、2種類のレポートにある。そこで、これまでの分析をもとに、私たちは今回の研究の結論を得るために、「知識の増加ならびに意識化」、「意識化を可能にする授業シラバス試案」の2点について考察する。

## 1. 知識の増加ならびに意識化

前述したように、今回の結論は短期・中期・長期の段階の変化のうち、短期（授業直後）の時点での考察に限定されることを、まず、確認しておかなければならない。その限りにおいて結論づけるならば、実践者の授業実践により、アフリカに対する受講学生の知識は増加し、意識化も図られたといえることができる。

まず、知識の増加についてみよう。今回知識の増減を測る指標は次の3つだった。

### ・自由記述による

国名	44カ国 (84.6%)	→	52カ国 (100%)
一人平均	8.8カ国	→	22.4カ国 (2.6倍)

### ・白地図記入による

国名	37カ国 (71.2%)	→	52カ国 (100%)
一人平均	7.5カ国	→	15.6カ国 (2.1倍)
首都名	10首都 (19.2%)	→	19首都 (38%)
一人平均	1.4首都	→	3.5首都 (2.5倍)

いずれの結果も、一人当たりの知識量が2倍以上になったことを示している。国名・首都名に関する限り、知識量は倍増したのである。倍増した後の知識量が多いか少ないかは今回の調査からだけでは判断できない。

また、受講生がレポートを書く過程で行った情報入手、情報処理によっても、受講生が新しい知識を身につけたことも間違いない。受講生のアフリカに関する最初の知識が少なかつただけに、知識の増加は明白なものとして私

たちには見えた。

次に、アフリカに対する受講生の意識化について見よう。人間の意識の変化を目に見える形にするのは難しいが、少なくとも今回の調査から次のことは言えるだろう。

最初のアンケートではアフリカに対して「特に興味・関心なし」と回答した受講者が18人(29.5%)いたが、受講後には2人(4.3%)へと激減した。この数値の減少はアフリカに対する意識の高揚を示しているとみることができよう。

興味・関心を持った理由に「レポートを書いたため」という受講生が4人いた。これも授業によるアフリカへの意識化を示す根拠とみることができよう。

最初、アフリカに興味・関心を持っていた受講生の意識は南アフリカに対する興味・関心に大きく偏っていたが、受講後は対象が分散する傾向がみられた。これは受講生のアフリカへの意識化の徴候と見ることができよう。

講義によってアフリカ報道に注意するようになったと答えた受講生は38人(86.4%)である。これも授業によるアフリカへの意識化を示す根拠であると言えよう。その証拠としてアフリカが抱えている問題に関して積極的な意見が目立った。

講義によって進路(職業選択)、または人生観に何らかの変化があった旨の回答をした受講生は15人(34.1%)であった。約3人に1人の受講生がそのように回答したということは、相当に高い率で意識化が受講生の間に起こったと推測される。

また、講義期間中、私たちの予期しない事態が起こった。講義に触発された受講生の一人が朝日新聞の「声」欄に投書し、それが掲載されたのである。それは予期せぬ驚きであったと同時に、うれしい反応でもあった。これは受講生の意識化の好例と言える。



こごめがやつり



力の諸問題について学んで  
届く必要があります。なか  
でも、なじみが薄い国々に  
関する情報の提供こそ、い  
ま、ぜひ報道してほしいと願  
います。

クラスでアンケートをし  
たところ、私たち学生はア  
フリカについてよく知らな  
い、ということを確認させ  
るをえませんでした。しか  
し、いま関心が持たれてい  
るのは南アフリカの人種差  
別問題やソマリアの飢饉だ  
といふことも同時に分かり

ました。  
これらは最近、新聞やテ  
レビで伝えられていること  
です。情報源としてのマス  
メディアの役割が非常に大  
きいことが明らかになりま  
した。  
国際化ということが盛ん  
に唱えられている今日の日  
本で、海外の情報がもって  
身近なものとして私たちに

生活や社会の様子などを如  
実に伝えてほしいのです。

こうした情報は、習慣や  
文化の多様性を伝えること  
もに、人間としての共通性  
を教えると思います。それ  
は、きっと日本の真の国際  
化に役立つものでしょう。

新聞の役割に期待すると  
ころはいろいろあります  
が、この視点は忘れずに、

### なじみの薄い 国々の情報も

調布市 田山 裕丈

(学生 22歳)

いま、私は大学でアフリ

享年

日

業行

月日

(平成4年) 10月18日 日曜日

さらに、講義終了後の12月18日は、3年生の卒論題目提出日であった。その結果、教育学科39名のうち実践者の卒論指導を希望するものが7名いたが、そのうち4名が途上国、うち2名がアフリカの教育について卒論を書きたいという希望を提出した。これは短期間的な意識化から中期的な意識化へとつながっていく可能性の高いものであり、今後が期待される。

以上にあげた要点により、私たちは「アフリカ諸国に対する大学生の知識および意識の低さは、アフリカの現実的な問題に関する講義を用意することによって改善される。アフリカに対する学生の知識の増加ならびに、アフリカに対する学生の知識の増加ならびに意識化が図られる。」という仮説が、短期的には正しかったことが高い確率で証明されたと結論づける。

## 2. 意識化を可能にする授業シラバス試案

ここでの目的は「アフリカの教育」に関する固定した授業シラバスを提出することではない。それは必ずしも整っているとは言い難い条件のなかで、アフリカ教育に関する良い授業をつくるためにはどのような工夫が可能か、という試案である。したがって、この試案は他の授業実践のモデルとしてではなく、アフリカ教育の授業づくりを行う際のヒントとして提出される。

受講生のアンケートを参考にしながら、今回の授業作りに役立ったものの要点を以下に記す。

### 1) 授業最初の2種類のアンケート

このアンケートは、受講生にとっては自分がいかにアフリカについて無知であるかを再確認させるきっかけとなり、実践者にとっては受講生の知識度ならびに授業への期待を知る資料となった。実際、今回の授業でも、受講生のニーズに応じて、当初の予定を変えて2回のアパルトヘイトについての講義を行った。

### 2) 受講生によるケニアのスライド上映

たまたま受講生の一人（大柿裕美さん）にケニアを題材とした開発教育

教材を作成した学生がいたため、彼らの作成したスライド教材を上映する機会を設けた。そのスライド構成、特にケニアの明るい子どもたちの姿は受講生のアフリカに対するステレオ・タイプを払拭するのに一役買ったようである。アフリカの子どもの映像は、これまで哀れみの心情を引き起こさせる性質のものが多かったので、このスライドにみられるようなたくましく明るい子どもたちの映像を見せることは、現実への認識のバランスを取り戻す意味で重要であると思われる。

3) 2人のゲストスピーカーを迎えたこと

「受講生による授業評価表」のアンケートの中で、22人(47.8%)の学生がこの授業のもっとも良かった点としてゲストスピーカーの話が聞けたことをあげていた。アフリカについて精通している日本人やアフリカ人を授業に招くことは学生のモチベーションを高める。一番興味・関心のある国としてケニア・タンザニアは3.2%から33.3%へと飛躍的に伸びている。

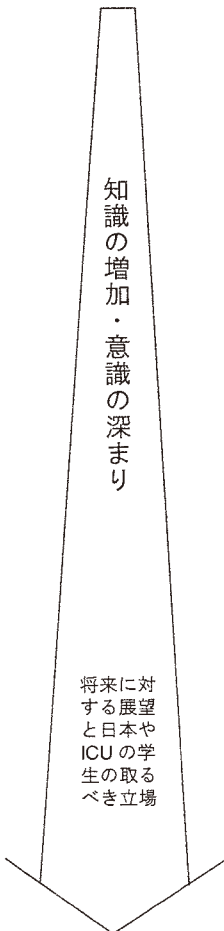
4) 視聴覚教材としての「シエラレオネの初等教育改革」も、受講生がアフリカの具体的なイメージを描く上で有効であった。

5) 中間・期末2度のレポートは受講生にとって資料を探す上での苦勞の多いものであったが、そのぶん充実感もあったようである。特にアフリカの大使館へ直接資料を探しに行った受講生は、その経験によりアフリカへの意識化が強められたようだ。

6) 中間レポートの教室内での発表も受講生の満足度を高めたようである。6人(13.0%)の受講生がこの授業のもっとも良かった点としてレポート発表を指摘している。苦勞して書いたレポートを発表できたという満足感と同時に、自分の選んだ国以外のことも知りたいという知的好奇心をレポート発表は満たしたためと推察される。

以上の要点を踏まえて、私たちは次のようなアフリカの教育に関する授業シラバス試案を提出する。

## 「アフリカの教育」授業シラバス試案

 <p style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">知識の増加・意識の深まり</p> <p style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">将来に対する展望と日本やICUの学生の取るべき立場</p>	第1講	アフリカに関するアンケート アフリカの教育を取り上げる理由づけ
	第2講	アフリカの現実：歴史・地理的概観 視聴覚教材使用 アフリカの近代化：口承による伝統的教育から文字による教育へ
	第3講	アンケートに基づき受講生のニーズに応じる 特にアバルトヘイトの概要
	第4講	アフリカの教育1 アジアババプランナー基礎教育普遍化と地域協力の起源ー
	第5講	アフリカの教育2 教育改革の試み
	第6講	アフリカの教育3 経済の停滞と教育危機
	第7講	ゲストスピーカーによる講演
	第8講	アフリカの教育4 学生のスライド発表 事例研究ータンザニアの教育およびケニアの教育ー
	第9講	中間レポートの提出 アフリカの教育5 事例研究ーシエラレオネの農村教育改革 (ブヌンプ・プロジェクト)
	第10講	ゲストスピーカーによる講演
	第11講	中間レポートの発表1
	第12講	中間レポートの発表2
	第13講	アフリカの教育開発と国際協力 世界銀行、UNDP、ユニセフ、ユネスコ、アフリカ開発銀行等の援助
	第14講	アフリカの教育6 グループディスカッション
	第15講	アフリカの教育7 アフリカの教育の展望と日本の教育開発援助の現状と将来の展望
	第16講	アンケート、レポート提出

### 注

- 1) 視聴覚教材はユニセフ、開発教育情報センター等で問い合わせ可能。
- 2) ゲストスピーカーは海外青年隊の協力隊のOB、OGにあたるのが有力。大使館への直接の問い合わせも可能。
- 3) ICU教育研究所に事務局を置くEducation and Development Network (EDNet) を通じての資料やリソース・パーソンとのコンタクトも可能である。

## 今後の課題

今回の研究は、一定の成果をおさめると同時に、新たな課題をも提起した。私たちはそれを今後の研究課題として次のように認識している。

- 1) 今回の研究は短期の自己評価である。したがって、中期・長期の自己評価をどのように行うか。
- 2) アフリカの教育に関する十分な資料が入手できなかったため、教育の国際統計を読み取りながら講義を進める割合が多くなった。ところが、この進め方は受講生には不評であった。受講生には国際統計を読み取る訓練がなされていなかったからである。今後は国際統計を読み取る訓練をしながらも、より具体的な情報収集に全力をあげなければならない。ちなみにICU教育研究所では1992年度からアフリカに関する教育文献の収集に着手している。その成果が2～3年後には授業にも反映されるであろう。
- 3) 今回の教室内アンケートは今後継続的に改善され、受講生の知識および意識をより正確につかむような工夫が求められる。
- 4) アフリカの教育をテーマにすることで、授業それ自体が国際理解教育の実践の場である。しかしその際には学習前と学習後で学習者にどのような変化が起こることを目標とするのかが、コース開始前に決定されていなければならない。今回の実践はその意味でまだ試行の段階であり、今後も実践を継続していく必要がある。
- 5) 今回提出した授業シラバス試案は今後私たち、さらには他の実践者によって追試され、改善されていく必要がある。同時にアフリカの教育に関するさまざまな研究も重ねていかななければならない。そして研究成果がデータベースとして蓄積され授業に反映されていくことによって、よりよいアフリカ教育の講座がつくられていくことが望ましい。
- 6) 学生が世界銀行、ユニセフ、UNDPなどの目的・活動を理解できるような情報を授業の中に取り入れていくことも課題である。それによって、

学生が国際的な仕事に参加できるという意識を持つことは、将来の専門家を育てる上でも重要である。

以上の6点が私たちの今後の主な研究課題である。研究と実践を並行して行うことによってアフリカ教育研究ならびに国際理解教育の進展に貢献できれば幸いである。

(今回の研究の資料整理並びにデータ処理に関しては、ICUの大学院生の田中知雄、原田一成、武藤小枝里、山口忍、および学部生の辻雅子・大柿裕美の尽力に負うところが大きかった。心より感謝する。)



発展途上国における教育  
クラスアンケート

資料 1

Q 1 アフリカの国々で知っている国の名前を記入してください。

Q 2 アフリカの国々であなたにとって一番興味・関心のある国はどこですか。

- 1) 特にない。  
2) ある。→国名 \_\_\_\_\_ 理由 \_\_\_\_\_  
\_\_\_\_\_

Q 3 最近、新聞やテレビで見たアフリカに関するニュースがあれば、その主なものを上げてください。

Q 4 あなたにとってアフリカのイメージを下から一つ選んで○を付けて下さい。

- 1) きれいだ      2) きたない      3) ちかい      4) とおい  
5) ゆたかだ      6) まずしい      7) あかるい      8) くらい  
9) 広大だ      10) 辺境だ      11) すずんでいる      12) おくれている  
13) その他 \_\_\_\_\_

Q 5 アフリカといえば何を思い浮かべますか。下から一つ選んで○を付けて下さい。

- 1) 大自然      2) 野生の動物      3) 部族(民)      4) アパルトヘイト  
5) 芸術      6) スラム      7) 奴隷      8) 難民  
9) 政情不安      10) 経済破綻      11) 紛争      12) 植民地  
13) その他 \_\_\_\_\_

Q 6 あなたのアフリカの子供のイメージを一つ選んで○をつけて下さい。

- 1) あかるい      2) くらい      3) うえている      4) ゆたかだ  
5) 不幸だ      6) たくましい      7) まずしい      8) かわいそうだ  
9) きれいだ      10) きたない      11) その他 \_\_\_\_\_

Q 7 これまでにアフリカに行ったり、住んだりしたことがありますか。もしあれば、その国名と訪問や滞在の年とその期間を記して下さい。

国名 \_\_\_\_\_  
年 \_\_\_\_\_  
期間 \_\_\_\_\_

Q 8 アフリカの教育に関して知っていることがあれば記してください。

Q 9 アフリカの教育に関して知りたいことがあれば記してください。

## 【アンゴラ】

小野 景子 『アンゴラの教育制度から見るアフリカの教育』

## 【エジプト】

田中 善幸 『エジプトの教育制度について』

西島 弘恵 『エジプトの教育について』

## 【ガーナ】

島本 陽介 『ガーナ共和国—英国流とナショナリズム』

竹内 千恵 『ガーナの教育状況と問題点』

野之村孝史 『ガーナにおける教育』

林 香織 『ガーナの教育』

堀川 京子 『ガーナの教育』

宮崎 洋子 『ガーナの教育』

松浦由佳子 『ガーナ共和国の教育』

## 【ケニア】

飯牟礼 歩 『ケニアにおける教育』

井垣 路子 『ケニアの教育問題』

植村千勢子 『ケニアにおける教育』

大柿 裕美 『ケニアの教育』

貴島 章夫 『ケニアにおける教育の歴史と実態』

小泉 敦子 『ケニアの教育』

竹中 宏美 『ケニア』

田中 秀典 『ケニアの教育について』

田山 裕丈 『ケニアの教育』

辻 雅子 『ケニアの教育』

敦賀 和外 『ケニアにおける教育』

中島 恵子 『ケニアの教育』

三好 康代 『発展途上国における教育—ケニア—』

## 【ジンバブエ】

星野よう子 『ジンバブエ—教育制度とその問題、そしてその展望』

## 【タンザニア】

- 秋山 真理 『タンザニアの教育における諸問題とその検討』  
 大山真理子 『タンザニアの教育について』  
 金森 陽一 『タンザニアの教育』  
 小坂順一郎 『自立の教育～タンザニアにおける教育の理念とその現実～』  
 田中 知雄 『タンザニアの教育』  
 福田 友子 『Education for Self-Reliance in Tanzania』  
 森谷 彩 『タンザニアの教育—経済発展のための教育か、人間のための教育か—』  
 若野 直子 『タンザニア 教育の現状とその問題点』

## 【ナイジェリア】

- 井上 知子 『ナイジェリアの教育』  
 川田 雅子 『ナイジェリアの教育—国民と識字教育』  
 澤田 千明 『高等教育を広げるために』  
 宿谷 仁美 『ナイジェリアの教育制度の問題点とその展望』  
 土岐日名子 『ナイジェリアの教育』  
 橋本比佐美 『ナイジェリア及びアフリカ全般における教育問題』  
 藤井 彰子 『Education in Nigeria』  
 宮崎 晶子 『ナイジェリアにおける連邦共和国の教育』  
 山田 淳子 『ナイジェリアにおける教育の現状、問題点および今後の展望について』

## 【南アフリカ】

- 尾形 麗 『南アフリカ共和国の教育について』  
 木村 由佳 『南アの教育問題—アパルトヘイト体制下の不平等教育—』  
 佐藤 央男 『アフリカ学校改革の潮流から見た南アフリカにおける教育改革に対する方向づけ』  
 平野 亜紀 『Education in South Africa』  
 榎原 涼子 『南アフリカ共和国の教育—黒人教育の充実に向けて、日本が協力できること—』

## 【モロッコ】

- 小寺 智子 『モロッコの教育』  
 服部 聡 『モロッコにおける教育について』

**A Research on the Awareness of Japanese University  
Students on African Countries**  
— from a lecture course 'Education in Developing  
Countries' at ICU —

A. Chiba, A. Terao, Y. Nagata

In the field of international aid and cooperation, particularly after 1980s, Africa has been attracting a world-wide attention, whereas our general attitudes towards Africa, with few exceptions, seem to be rather negligible and our knowledge on Africa limited or biased.

University students in Japan, in this respect, are no exception. How many of them know how much of African nations, races, nature and cultures? On the other hand, we can find many problems in the attitudes of Japanese universities. Do they offer sufficient courses to meet the demands of the students interested in African studies? Are there any attempt by professors to present lectures on Africa? Unfortunately, the responses to these questions are all unfavorable ones.

The present authors, on the assumption that Japanese university students lack some basic knowledge on Africa and even may have some prejudices on the continent, would like to present a practical paper on how to raise awareness on Africa among the students in Japan by setting up special courses on Africa.

#### **PURPOSE**

Our research and studies took place in autumn term 1992 in the university

course of 'Education in Developing Countries.' The main purposes of the research can be summarized in the following two points:

1. Our hypothesis is: limited knowledge and lack of awareness on Africa among Japanese students can be improved through lectures focused on the realistic problems of African countries. We have set our first and foremost objective to check the validity of this hypothesis in the practices of special course on African education.

2. Our second purpose to prepare a course syllabus on education in Africa as one of prototypes. It is quite difficult in Japan to prepare courses on the theme because of the lack of reference sources and rare resource persons. However, the syllabus was made in the hope that it would be one of the prototype courses for prospective lecturers who intend to present in similar course and that in the long run it would make some contribution to the field of international aid and cooperation.

## METHOD

As data sources, we have used two reports, two kinds of class-room survey and evaluation sheets by the students.

We have conducted two forms of class-room survey. One is a general questionnaire on Africa presented to the students in the class on the first day of the course. We also asked them to fill out the revised version on the last day of the course.

Another form is also a questionnaire on Africa but with a map of the continent. The students were supposed to write down all the names of the capitals and the nations on appropriate places. This too was given twice on the

second and last days of the course.

Apart from our own questionnaires, 'evaluation sheets by the students' were also filled out. We have used them as one of our essential data sources.

As a means of grading, Prof. Chiba required all the students to submit mid-term and final reports with the following conditions.

**Mid-term Report:**

Choose one of African countries, and pick up any interesting themes such as politics, economies, religions, societies or cultures of the country. Do some research, for example by visiting African embassies, and make reports on the themes you have chosen.

**Final Report:**

Present papers on education of the country which you have chosen for the mid-term report, describing its educational history, system or problems.

## RESULT

As a conclusion, it has been quite clearly proved that, in short-term vision, our before-mentioned hypothesis has high validity: that is, limited knowledge and lack of awareness of the Japanese university students on Africa can be improved through appropriate procedures given by special courses on African education. Concerning the accumulation of the knowledge on Africa, clear improvement was indicated from various data. Also, it can be said that, through the course lectures, some of the students have become aware of the strong need for international aid and cooperation between African countries and Japan, and have shown interest to work in this field in future.

We have also attempted to make a course syllabus to raise awareness on

Africa among the students. However, the aim of our presentation of the syllabus is not to make a fixed syllabus as a 'model.' It is rather shown as a 'hint' in order to encourage the increasing offer of lecture courses on African education.